

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

平成 29 年 9 月 2 日	
所属部局・職	霊長類研究所・博士課程学生
氏名	武 真祈子

1. 派遣国・場所 (〇〇国、〇〇地域)
ブラジル、ゴイアス州ピレノポリス 及び アマゾナス州マナウス
2. 研究課題名 (〇〇の調査、および〇〇での実験)
ブラジル霊長類学会への参加 (ピレノポリス)、および Wilson Spironello 博士との面談
3. 派遣期間 (本邦出発から帰国まで)
平成 29 年 8 月 18 日 ~ 平成 29 年 8 月 28 日 ( 10 日間)
4. 主な受入機関及び受入研究者 (〇〇大学〇〇研究所、〇〇博士/〇〇動物園、キュレーター、〇〇氏)
国立アマゾン研究所 (INPA)、Wilson Spironello 博士
5. 所期の目的の遂行状況及び成果 (研究内容、調査等実施の状況とその成果：長さ自由)
写真 (必ず 1 枚以上挿入すること。広報資料のため公開可のもの) の説明は、個々の写真の直下に入れること。 別途、英語の報告書を作成すること。これは簡約版で短くてけっこうです。

①ブラジル霊長類学会への参加

【目的】

申請者が今後南米でサキ (*Pithecia* 属) の研究を進める上では、マナウス以外のフィールドで研究を行っているブラジル人研究者からの協力や助言が欠かせない。サキ科は他の新世界ザルのグループに比べて publish されている情報量が少ない。学会を通してサキ研究者と直接コネクションを築き、最先端の知見を入手することが重要であると考え、参加を決めた。

【成果】

◇サキ *Pithecia* の研究について

「サキの研究について知る」「サキの研究者とコネクションを築く」という目的は、はっきり言って叶わなかった。理由は単純に、サキの研究をしている人が思っていたより少なかったからである。サキは日本でこそほぼ知られていない霊長類だが、ブラジルではもっと一般的で研究者も多いのではないかと、というのが渡航前の予想だった。だが、「サキの研究者を知らないか」と誰にきいても、「さあ・・・」というような反応で、サキについて詳しい人物と話をすることはできなかった。サキはアマゾン地域にのみ分布していること (ブラジルの霊長類学はサンパウロやリオなどブラジル南部で盛ん)、サキの行動・生態的な特性 (あまり音をたてない、種密度が低いいため、野生下では行動観察が比較的難しい)、保全的観点からの危急性が比較的低いことなどが、研究者の少ない理由なのではないかと思う。

学会でサキの話ができなかったのは残念だったが、研究が盛んでないということは、私が参入する余地があるということでもある。アメリカのいくつかの研究室では現在もサキの研究が行われているそうなので、数少ないそういった研究者と今後ぜひつながりを持ちたいと思った。今後の渡航でアメリカを経由する際などに面会できないか、調整したい。

◇学会全般について

規模は 200 人ほどだった。ホテルのイベント会場を貸し切って、4~5 部屋ほどに別れ、ラウンドテーブル形式の集会や、オーラル発表が行われた。ポスター発表は会場外の回廊で行われた。発表は基本的にポルトガル語で、ごくたまに英語の発表者がいた。私は発表や質疑応答の内容についていくのは難しかったため、なるべく多くの人と個人的に会話をし、連絡先を交換することに重点をおくことにした。口頭発表に興味を持った研究者や、ポスター発表での交流をとおして、20 人ほどのブラジル人研究者と連絡先を交換することができた。ブラジルの霊長類学会のトレンドとしては、「保全」の色がとても強いと感じた。保全に関するセッションがほとんどで、それ以外のものを探すほうが難しいくらいだった。ブラジルは世界一霊長類の多様性が高く、同時に開発による森林破壊がとくに深刻な国でもある。そのため保全研究が盛んに行われることは必然であり不可欠だが、もう少し基礎的な行動や生態の話があってもよいのになあと感じた。私が博士課程でやろうとしている

研究は、直接的に保全に結び付けられるものではない。保全色の強い学会の中で、サキの基礎研究をやる意味をどう位置付けアピールしていくか、ということを考えないといけないと感じた。

余談になるが、発表スライドの中に、Kinji Imanishi の名前と幸島のニホンザルが登場したことがあった。霊長類学の歴史についての文脈だったと思う。日本人やニホンザルの話が出るとうれしくなって、ついにやにやしてしまった。仲良くなった学生に実習で幸島に行ったと話すと、「イモを洗っていたか!？」と、かなり興奮気味に聞かれた。学会に向かう道中はとても緊張していたが、幸い、マナウスで交流のあった女子学生が2人参加しており、彼女たちのサポートのおかげで4日間楽しく過ごすことができた。2年後の同学会では私もぜひ発表をしたいと思う。

## ②マナウスでの Wilson 博士との面談

### 【目的】

ブラジル側のカウンターパートである Wilson 博士と、申請者の今後の研究計画について相談することを目的とした。Wilson 博士は多忙のため、メールでのやりとりには時間がかかり、意志の疎通を図るのが難しい。直接対話することで調査許可申請プロセスを前進させることを期待した。

### 【成果】

とても充実した話し合いができた。Wilson さんと1時間、ウアカリ研究者の Adrian さんと1時間、さらに Wilson さんと Adrian さんと3人で1時間、主に私の博士課程の研究テーマについてディスカッションをすることができた。お忙しい中、しっかり時間をとっていただけて大変感謝だった。

今回の大きな目的は、今私がやりたいと思っている研究テーマを伝え、それについてコメントをいただくというものだった。これまでやってきたテーマとは毛色の違ったものになるが、「サキに重点を置いて基礎的な研究をしたい」という希望を初めて伝えた。いくつかのテーマを箇条書きにして持って行ったが、その中でも特に私が興味を持っていたテーマについて、Wilson さんも Adrian さんも大変興味をもち賛同してくださった。さらに私にはなかったアイデアをいくつも加えてくださり、博士研究の枠組みがおおよそ固まった。メールでは話しきれない内容だったので、今回直接会うことができて本当によかった。

さらに、私の修士課程での研究についても話した。私は、データ量が少ないことから投稿論文にすることをあきらめていたが、Wilson 博士から INPA が発行している国際紙への投稿を勧めていただいた。「データ量が少なくても公開する価値はある。ぜひ出さない」と言ってくれていただき、大変うれしく思った。

### 【今後の計画】

研究テーマはおおよそ決まったが、まだ詳細を詰め切れていない。ブラジルで研究を開始する（許可を得る）ためには、かなり詳細なプロポーザルが要求される。今後、早急にプロポーザルを書くとともに、修士論文を投稿する準備を進める。今回、直接話をするのでいかに物事が前進するかがよくわかったので、それらの執筆作業を日本ではなくマナウスで行うことも視野に入れて今後の動きを考えたい。

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)



上：ブラジリアからピレノポリスへ向かうバスの車窓から。広大なセラード（ブラジル中央部の高原地域に広がるサバンナ）。3時間ずっとこの景色だった。アマゾンの熱帯雨林とは全く違った植生だが、「見渡す限り」という点では共通している。

下：セラードといえば有名なのがシロアリ塚。一面にある茶色の物体はすべてアリ塚である。夜にはアリクイがやってくるという。

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書  
(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)



上：学会が行われたホテルのイベント会場。コーヒーブレイクの様子。

下：ピレノポリスの街並み。リゾート地らしく、こぎれいで治安のよさそうな町だった。

**6. その他** (特記事項など)

急な出張申請だったにもかかわらず了承して下さったコーディネーターの松沢哲郎先生、サポートして下さった PWS 支援室の皆様へ深く感謝いたします。ありがとうございました。